

2023年6月17日(土)

日光街道つまみ歩き (その5)

山口光恒・幸子

今市—日光

昨年10月から5回に分けて日光街道の「つまみ歩き」を続け、漸く今回、目的地の日光まで到達することが出来た。昨年6月の旧東海道完全踏破に続き、今回も(完全踏破ではないが)目標を達成できてほっとしているところである。天気は快晴、家からの往復の歩数は31100歩であった。日光街道を歩いた距離は凡そ8.5kmであるが、街道終点から東照宮を往復した等もあって総歩行距離は13km程度と思われる。何とか今年の梅雨前に日光への到達を目指したが、春の東北への旅行、連休中の伊豆での逗留、5月中旬の学生時代の友人達との長野・小諸の旅、5月末から6月にかけて旧東海道完歩1周年を記念しての天津・京都の旅などもあって予定より遅れていた。その後今年は例年より早く梅雨になり、こちらが都合の良い日になかなか晴れの日がなかったこと、更に結果としては宿泊しなかったが日光で金谷ホテルに宿泊するプランがホテルが満杯で延び延びになっていたことから、本日の快晴を利用して日帰りで決行したものである。

6時32分西大井発の横須賀線に乗り、新橋から地下鉄銀座線で浅草まで行って東武線の下今市までの特急券を購入する。狙っていた7時半の特急は満席だったが、7時50分発の切符が買えた。時間があるので駅の待合室で珈琲を買って持参したパンで朝食。切符通常は事前に購入しておくのだが、今回は天気予報がくるくる変わったこと、直前まで金谷ホテルへの宿泊の有無が決まらなかったことからこうしたことになった。なお、学生時代の友人赤松清さんが東武鉄道の株主で優待券を送ってくれたので乗車券は無料となり、大いに助かった。この点この場を借りて赤松さんに深謝したい。

出発日の深夜に光恒が初めて足がつり暫くベッドに腰掛けて痛みの治まるのを待ったこともあり大分寝不足の状態だった。幸子は時々こうしたことがあるというので薬を持っている。9時30分に下今市で下車するが、水分が不足すると再度足がつる可能性が高まるとかで、駅そばのコンビニでポカリスエットとアクエリアスを各1本購入し、30分ごとにこれを飲んだ。お陰で光恒は事なきを得たが、幸子が時々足がつりそうだというので、持参の薬を飲む場が2・3度あった。二人とも後期高齢者なので仕方が無い。むしろ歩けることに感謝せねばならない。

9時55分、前回立ち寄ったが会えなかった大学同クラスの渡邊護さん(老舗の蔵元渡邊佐平商店会長)を訪ねる。5分ばかり立ち話をし、秋のクラス会での再会を約して再び街道歩

きに戻る。今市の中心部こそ普通の道だったが、10時9分に早速杉並木となる。道の両側に小川が流れていて涼しい。入り口に杉並木の説明があり、松平正綱・正信親子が寛永2年（1625年）から20数年の歳月をかけて完成したこと、現在国の特別史跡と特別天然記念物に指定されている国内唯一のものとの説明がある。この他長さについてのギネスブックへの登録の記述もあるが、この点については前回の記録を参照願う。しかし1961年には16500本あったものが現在では12200本に減少したとの説明があり、実際我々が歩いてもあちこちに立ち枯れた杉の大木があり、維持の苦勞が察せられた。中には戊辰戦争の時に日光に籠もった幕府軍と官軍の戦いで銃弾が杉の木に当たり穴の空いたまま残されている樹木もあり、歴史を感じさせる。この少し先に幕府軍の陣地跡があったようだが気づかなかった。写真1はこの辺りの杉並木風景。

11時過ぎに薬師堂通過、その少し先に日光古道との分岐点がある。11時50分明治天皇が東北巡幸の帰途に立ち寄った休憩所跡を通過。12時20分JR日光駅前を通過したが、すぐ後に日光杉並木碑が建っている。ここからは舗装道路だ。12時25分東武日光駅前に到着、ランチとする。ここで街道歩きの先輩吉田清直さん達の記録を見ると、金谷ホテルのベーカリーで軽いランチをしたとの記録があるので、その店を探し当てたが、現在はパンの売店だけで、食事は一切やっていないとのことだったので、別のレストランに入って光恒がハンバーグ、幸子がローストビーフ丼でゆっくり昼食をとる。オードブルも供され、味もサービスも良かった。光恒はつい生ビールに手を出して良い気分となったが、街道歩きの終点までにはまだ若干の距離があり、更にその先の東照宮は大変な上り坂だったので、このときになってビールを後悔したが時既に遅しであった。

ランチのあと目の前の東武日光駅にて帰りの汽車の席を予約し、愈々日光街道終点の鉢石宿に向けた最後の3.5kmに挑む。この道は広く、左右に歩道も整備されている。街道の終着点に向けて緩やかな一直線の登りで、その先に日光東照宮があるため観光客で大混雑で、道の両側には地元名物の湯葉や羊羹などの専門店に加え、鮎をその場で焼いて食わせる店、ソフトクリームやその他あらゆる食べ物屋が店を出し、そのいずれも結構な数の客が入っているという状況で、とても静かな街道歩きの雰囲気ではない。杉並木を歩いている間中ほとんど人に会わなかったのと比べると対照的である。14時15分漸く終着地に到達、「これでつまみ歩き」ながら日光街道を終点まで歩いたことになる。終着点は大谷川にかかっている神橋を渡ったところだが、ここを通るのに入場料がかかり、加えてこれを支払っても神橋を歩いても対岸に渡ることは出来ない構造で、街道歩きの人も含めて圧倒的多数の人はその横にかけられたコンクリート製の日光橋を渡っている。我々もこれに従った（写真2）。

これで目標は達成したが、折角ここまで来たので東照宮を見学すべく更に先に進んだ。ここは言わずと知れた徳川家康を祭った神社で、家康の死の1年後に久能山から亡骸が移され

た場所だ。パンフレットによれば境内には国宝 8 棟、重要文化財も 34 棟あるとのことだったが、如何せん日光橋までが長いだらだらの上り坂だったことに加えて、橋を越えると急勾配の長い階段が続き、ランチのビールがここで効いてきた。幸子は特に転倒を避けようと慎重に登るがこちらにも疲れが見える。こうした次第で途中三仏堂や五重塔などをちらっと横目で見えて通り過ぎ、専ら陽明門のみを目指した。ここに達するために再び急階段を上らねばならず、建造物鑑賞どころではなくなってくる。漸く陽明門に達したが（写真 3）、とにかくキンキラキンだ。つい半月ほど前に見た石山寺、三井寺、東寺などのお寺や、もう少し派手な上賀茂・下鴨神社と比べてもきらびやかさが目立ちすぎる。矢張り参拝者に徳川幕府の金力と権力を見せつけるという意図が極めて強い建造物だとの感を強くする。この意味からは期待外れだった。陽明門を入った左の神厩舎には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿の彫り物もあったはずだが、疲れが増してきたのでそちらにも廻らなかつた。

この近くには日光二荒山神社など著名な場所もあったが、ここで日光見学を打ち止めにして山を下り、疲れを癒やすために明治の初期にかのイザベラ・バードも訪れた金谷ホテル（当時はホテルではなく金谷さんの自宅）に立ち寄った。入り口から若い女性社員が出てきたのでロビーでお茶を飲みたいと言ったところ、グリルは 3 時で閉店なのでホテルには入れないと断られた。これまで日本や世界の有名ホテルには随分行ったが、そもそも一流のホテルで午後の喫茶を楽しめないなどと言うのは全くなかった。ましてやホテルのロビーにも入れないなどと言うのは言語道断だ。我々は出来ればこの日は金谷ホテルに一泊して帰ろうと思っていたが、生憎満室のため日帰りとした経緯がある。この若い女性従業員の態度にさすがの幸子もカンカンに怒っている。そういえば数日前に光恒が宿泊の件でホテルに電話をした際の相手の対応が極めて効率性を欠き、さらにすぐ横の別館の工事が週末も含めて朝 7 時から夜 7 時まで続行する中で騒音の激しい一般客室の営業を続けるなど、おかしいなと思っていた矢先のこの事件だ。これで我々は今後このホテルには泊まることはないだろう。それよりも我々の日光に対する印象が随分阻害されたことも事実である。ホテルの経営者と呼んでこのことを言おうと思ったが如何せん中に入れてくれないので、後味悪くこのホテルを後にした。

途中とあるカフェで一休みし、購入してある帰りの特急の時間より駅に 1 時間以上早く着いたところ、10 分ほどで新宿行きの特急があり、席があるというのでそちらに買い換えて午後 8 時に帰宅した。この列車は一つの車両に 10 名ほどしか乗客がなく正にがら空きの状態だった。その少し後に出る浅草行きの特急は混んでいて切符が購入できない状態であったにも変わらずである。湘南新宿ラインに乗り入れた相鉄線が空いているのと同じ理由か否か、七不思議である。

いずれにしても日光街道つまみ歩きの目標達成でほっとしているところである。

(写真 1)



日光の杉並木 (この辺りの杉はあまり高くない)

(写真 2)



日光街道終着点 (手前が日光橋、後ろが神橋)

(写真 3)



東照宮 陽明門 (階段の上り下りがきつい)